

Eureka XII

六年制通信 No.19 令和6年9月20日(金)号

静けさがほしい

もう20年も前になりますか、奥本大三郎さんがファーストの『昆虫記』の完訳を出したのは。私はこの先生の『虫のあどろ』が面白くて好きでね、諸君にも紹介したし、また図書館に文庫版を置きました。読んだ人いますかね。学習意欲のない大学生に絶望するくだりが笑えるのですが、それとは別によく今の世に得難いものを三つ挙げておられまして、私はこれにも非常に共感しているのです。何度も紹介したように思うのですが「きれいな水と静けさと上品な言葉づかい」がそれです。最近これらがますます貴重に思えてきました。この中で今後復活できる可能性は「きれいな水」くらいではないでしょうか。悲しい。上品な言葉づかい、これはひょっとしたら小さなコミュニティでは今も存在しているかもしれませんが…。テレビの悪影響でしょうが、大声で早口で騒がしく話す人々を君たちは観すぎているように思います。テレビの世界では語彙も貧困です。この夏は必要があってドキュメント番組や映画に長く時間を割いたのですが、ということはテレビの前にいる時間もいつもの夏以上にあったわけで、そうすると映画の合間などに情報番組と称するワイドショーが目に入りまして、適当に各局を観ていたのですが、どれもステレオタイプで全く面白くなかったですね。いつも言うように、難しい問題を素人にコメントさせるから何ら新しい知見もない当たり障りのない表現しか生まないのでしょうね。そして、それがわかりやすいと勘違いしています。ちょっと言い過ぎかもしれませんが印象としては、いい大人が「横断歩道は手を上げて渡るべきだと思います」みたいなレベルのことを真顔で発言し、周りの大人たちもうなずいている、そんな感じを受けます。たまに論争のようなものもありましたが私の見た限り、論争ではなく口喧嘩でした。

論争と言えば、余談ですがあれは何年前かな、もう50年くらいになりますか、参議院の平泉渉が英語教育の改革試案を出しまして、上智大学の渡部昇一教授と論争になったことがあります。平泉試案では学校教育において日本人の5%が英語を徹底的に勉強すればいいのであって、あとは何年勉強しても手紙一つ書けないのが現状なのだから必要ないというものでした。これに対して英語教育の専門家たちは沈黙し、英語学の渡部教授だけが反論したのでした。これが一冊の本になっています。『英語教育大論争』です。これは論争の見本です。論理的だし、渡部教授は特に知的バックボーンが凄まじいですから読んでいて勉強になるしユーモアさえ漂っています。図書館の私のコーナーに文庫本がありますから参考に読んでごらん。

静けさが欲しいという話でした。この「静けさ」というのは普通騒音のない静か

な状態のことを指しますが、実は頭の中の静けさも大切だと思います。そしてその大切な静けさを私たちは失いつつあるのではないかと危惧しています。ネットの情報は過多で、四六時中真偽の分からない概ねくだらない情報にさらされ、君たちはいつも気が散っている状態にいるのではないかと思うのです。頭の中は常に騒がしいのではないかと心配しています。騒がしいと、本来見えるはずのものが見えなくなります。

一つの寓話を紹介しましょう。何が読み取れますか。

一頭のカバが川を渡っているときに自分の片方の目をなくした。カバは必死になって目を探した。前を見たり、後ろを見たり、右側を見たり、左側を見たり、体の下を見たりしたが、目は見つからない。川岸にいる鳥や動物たちは「少し休んだ方がいいよ」と助言した。しかし、永遠に目を失ってしまうのではないかと恐れたカバは、休むことなく、一心不乱に目を探し続けた。それでも、やはり目は見つからず、とうとうカバは疲れはてて、その場に座りこんでしまった。カバが動きまわるのをやめると、川は静寂をとり戻した。すると、カバがかき回して濁らせていた水は、泥が沈み、底まで透きとおって見えるようになった。こうして、カバはなくしてしまった自分の目を見つけることができた。

今週のおすすめ

・森沢明夫 『本が紡いだ五つの奇跡』（講談社文庫）

森沢さんが続きますが、これは是非読んでほしい本なので紹介します。第一章は編集者の津山奈緒の物語。青春時代に苦しくて死にたくなった自分を救ってくれた一冊の本。その本を書いた著者が今は売れない推理作家になっている。その作家の担当として手を挙げた津山は、もう一度あの感動作のような物語を書いてもらうように頼みに行く。第二章がその涼元マサミという作家。離婚された元妻の再婚により、愛する娘にもう会えなくなる…。作家としての才能も自分にはない。しかし娘にはいつか娘を主人公にした小説を書く約束している。そんな時津山の提案を受ける。第三章はブックデザイナーの青山哲也。涼元マサミの新作『さよならドグマ』の装丁を頼まれるが、彼の体はがんに侵されている。しかし愛する妻にそのことを話せずにいる。第四章は書店員の白川心美。気になるお客さんがいる。美大生の唐田健太郎。それぞれの悩みを抱えながらも、ひょんなことからこの『さよならドグマ』が二人の橋渡しとなる。第五章は健太郎の父唐田一成。妻を亡くし美容室を経営して暮らしている。健太郎は父に再婚するようにアドバイスをし、一冊の本を贈る。一成にはお客さんで勝手に「夕風さん」と名づけている素敵な女性がいる。その女性を、読んでほしい本がありますと言ってデートに誘う。ところが、健太郎からもらったその本と同じものを夕風さんは娘からもらっていた。

さて、五人それぞれの再生物語です。読後感が非常にいいですよ。ちなみに『大事なことほど小声でささやく』（幻冬舎文庫）もお勧めしておきます。これもまた、人生に悩む多くの人を勇気づける本だと思います。

BGMは Sheena Easton の *9 to 5 (Morning Train)* でした…。